
マビノギ 楽園を求める者たち

ネレイア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マビノギ 楽園を求める者たち

【Nコード】

N2304T

【作者名】

ネレイア

【あらすじ】

この小説はネクソン社の運営するオンラインゲーム「マビノギ」を元にした二次小説です。多大なネタバレを含み、公式にはない設定だったり、オリジナルキャラが登場したりします。二次小説が嫌いな方、キャラ崩壊を起こしたくない方は読まれないことをお勧めします。

初心者なので、文章・文法がおかしいこともあると思いますが、どうかご容赦ください。

登場人物紹介

ネレイ 14歳 ミレシアン♀（人間）

1年前にエリンにやってきた人間のミレシアン。エリンに来る前の記憶がない。困っている人は放っては置けないお人好し。しょっちゅう無茶をするため周りはいつもハラハラしている。近接特化の戦闘スタイルをとる。他人が傷つくのをひどく恐れているため、ヒーラーも目指している。武器は、メイン・トゥハンドソード。サブ・バスタードソード2本。深紅の髪に瞳。ピンクのバンドナに、赤いアリッシュアシュビンアーマーを装備。とにかく赤とピンク色を好む。ペットはミニユニコーンの「スノーファイア」。

剣技に関しては一流の腕前で、ティルコネイルの人たちからとても頼りにされている。穏やかな性格で、無駄な争いはなるべくしないが、必要とあらば容赦はしない。

キア（kia） 19歳 ミレシアン♂（人間）

「黒衣の剣士」と呼ばれる青年。紫の髪のオールバックで、紫の瞳を持つ。真つ黒の見習い錬金術師のコートを着ていて、色は黒を好む。戦闘スタイルは同じく近接剣士。武器は、エグゼキュソナーズソード。ペットはハヤブサの「ひわつぴ」。セレネからは、ネーミングセンスがおかしいと思われる。

猪突猛進・軽い性格で、よく弟のステイに窘められている。ネレイ曰く、「どちらが弟かわからない」。しかし、色々と謎が多く、まだネレイたちは知らない秘密がある。

ステイ（stilet） 18歳 ミレシアン♂（人間）

キアの弟。少しだけ長めの黒い髪、黒い瞳をしている。黒いらふティオズアーマーを装備していて、キア同様漆黒の格好をしている。戦闘スタイルは、ネレイ、キアと同じ近接剣士。武器は、メイン・

レミリア星月の剣。サブ・グラディウスにヘテロカイトシールド。所有しているペットは、白虎の「白夜の剣」とサラブレッドの「漆黒のサラ」。

無口・無愛想な性格で、よく人から誤解されがち。ただ面倒見はよく、ネレイも多少世話になったことがある。無茶ばかりするネレイを常に心配している。

セレネ（セレネ嬢） 13歳 ミレシアン♀（人間）

戦闘よりも生産に力を注ぐ女の子。そのため戦闘はそんなに得意ではない。まっすぐな黒髪に青い瞳。白を好み、白銀のローズプレートアーマーを装備している。精錬・鍛冶・紡績・裁縫・ハンディクラフト・木工様々な分野に手を出している。ステイ曰く、「器用貧乏女」。鍛冶と木工だけはそれなりの技術があり、ステイのグラディウス、ネレイのアーマーはセレネが作った。戦闘スタイルは、弓しか使えない遠距離型。武器は、自作のレーザーロングボウ。所有ペットはボルゾイの「シルバー」。

器用なので、弓の腕は確か。ネレイとは仲がいいが、ステイには苦手意識がある。

シオン（漬音） 16歳 ミレシアン♀（人間）

魔法使いの女性。紫の髪のポニーテール、同じ色の瞳。らふティオズアーマーを装備している。魔法攻撃型で、武器はメイン・メタルアイスワンドとカイトシールド。サブ・打撃用ワンド。所有ペットは、イエロースプライトの「クレセ」。

氷属性の魔法攻撃が得意で、とても優しい性格。大体の魔法に精通していて、戦いでは援護に徹している。セレネにとってはよきお姉さん、といった存在。

プロローグ

ウルラ大陸の辺境にある小さな村「ティルコネイル」。そこは本当に静かな田舎であった。

そこから更に北西にあるあたり一面雪原の「シドスネッター」。イウエカが昇るころ、誰もいないはずのその土地に一人の青年がいた。

「あれからもう2年……」

茶色いマフラーローブに身を包み、瞳には深い悲しみを浮かべている。

「ルエリ……マリー……」

青年の声は弱弱しく、最後まで聞き取ることはいできない。

パララが上がるころには青年はすでに消えていた。代わりにそこにいたのは一匹のクマだった。

第1話 紅い少女

ティルコネイルにある「アデリア川」のほとりに、一人の少女と一匹のとても珍しい純白のミニニコーンがいた。少女は深紅の長いまつすぐな髪に、同じ色の瞳をしている。少女の名はネレイ。一見は普通の女の子だが、彼女は、「ミレシアン」である。ミレシアンというのは、ほかの世界からやってきた魂が、「ソウルストリーム」を通じてエリンに再び生まれてきた者たちのことである。ミレシアンは、体力・精神ともに、常人よりも優れている。ネレイは普通の人（少なくとも普通の少女）にはまず使いこなせない両手剣「トウハンドソード」を背負っている。この剣はお飾りではなく、ネレイは一流の剣士である。

傍らにいるミニニコーンはスノーフィア。ネレイの一番の友達である。スノーフィアは、外見とは裏腹に強靱な生命力と、攻撃力を持っている。

ネレイとスノーフィアのコンビを知らない人は、少なくともティルコネイルにはいない。

『ネレイ様、今日は何か仕事はないのですか？』

スノーフィアの声がネレイの頭の中に響く。ネレイとスノーフィアは会話ができる。しかしそれは、スノーフィアが声に出してしゃべっているわけではなく、ネレイの頭に直接自分の意思を伝えているのだ。テレパシー、といえばわかりやすいだろう。

「今日は特に何もないよ。ダンカンさんからも何も聞いてないしね」
ダンカンとは何かとネレイに頼みごとをしてくるこの村の村長である。村人から大変慕われていて、若いころは弓の名人としてそれなりに有名だったとか。ネレイも弓のことで色々ダンカンからアドバイスをもらったことがある。

『でしたら魔法の練習はどうでしょう？』

「むう……」

渋い顔をして唸るネレイを見て、スノーフィアは内心苦笑した。

ネレイは、剣技に比べ魔法は少し苦手だ。それでも、常人よりは優れている。もう少し練習すればすぐに成果は出るだろう。そうすれば、もっとスムーズに戦えるようになる。そう見越してスノーフィアは言ったのだが：

「いや、やめとく。それよりもハーブ類がもう少なくなっていたと思うからそれを探りに行こう」

『わかりました』

ハーブとはいわゆる薬草のことで、ネレイは薬草学を学んでいる。学んだことを活かして、ポーション調合に役立てようとしているのだ。他人が傷つくことが嫌いなネレイは、ヒーラーも目指している。そのため、応急処置・薬草学・ポーション調合・ヒーリングを修業中である。

ハーブは主にダンジョンに生えている。ダンジョンによっても生えているハーブの種類も違う。基本となるのはベースハーブ・ブラッディハーブ・サンライトハーブ・マナハーブの4種類である。

「準備したらキアダンジョンに出かけよう」

スノーフィアも了解という風に小さく頷く。はたから見たらただの主従関係に見えるがネレイには全くその気はない。スノーフィアはいつも自分を助けてくれる大切な相棒である。スノーフィアにとってもネレイは大切な人である。守らなければならない、それが自分の使命であると感じている。

エリンに来てからずっと一緒だった二人の信頼は深かった。

ところ変わってキアダンジョンのロビー。ティルコネイルの北東にある草原を抜けた場所にあるダンジョンだ。

シドスネッターへ行く道の途中にあるアルビダンジョンよりも難易度が格段に上がって、最奥には巨大なゴーレムやメタルスケルト

ンもいて、一人では攻略は難しい。しかし、ネレイにはスノーフィアがいる。仮にスノーフィアがいなくともネレイならば攻略するのはた易い。

アルビではハーブは収穫できないため、二人はよくキアに来るのだ。

『ここに来るまでのオオカミのことですが、以前よりも増えていますでしたか？』

キアに来るまでには、オオカミのいる草原地帯を通らなければならない。基本オオカミたちはおとなしいのだが、ごくたまに襲ってくるオオカミもいる。スノーフィアが言っているのは、「襲ってくるオオカミ」のことだった。ネレイもそれを感じていた。

「確かに、以前よりちよつと増えたかもね。ディアンの所の羊もたまに襲われているようだし……」

ディアンとは羊飼いの少年のことである。15歳くらいで、肌が浅黒く、とても元気だ。以前ネレイは、羊を襲ってくるオオカミの退治を依頼されたことがあった。

腰に差してある二刀のバスタードソード（銀行から引つ張り出してきた）を抜き放ちながら、ネレイは言った。

「今はそのことは保留にしよう。後でダンカンさんや先生たちに相談すればいい」

『そうですね。……気を付けてください。怪我しないようにしてくださいね』

「ん……」

言葉少な気なネレイは応じる。無愛想なのではない。集中力を高めているのだ。これなら大丈夫だと、スノーフィアは安心した。そして二人は女神像に短く祈りをささげ、ダンジョンの奥へと向かっていった。

ダンジョンごとに出現する敵も決まってくる。アルビなら主にクモや蝙蝠、ミミックだが、キアはミミックに加え、ゴブリンが出て

くる。ゴブリンは少しばかり厄介で、武器を使ってくる。武器の種類は主にこん棒や弓である。今ネレイが対峙しているのはこん棒を持ったゴブリンだった。

「セイツー!!」

二刀のバスタードソードを自在に操り、次々とゴブリンたちを斬りつけていく。対するゴブリンたちは何とか勢力を固めてネレイに襲いかかるうとするが、知能が低く、さらにさほど素早くない奴らは為すすべもなく絶命していった。

スノーフィアの方は、弓を持ったゴブリンたちの方を相手にしていた。弓は殺傷力が高く、当たれば必ずと言っていいほど負傷する。ネレイが戦いに集中できるよう、スノーフィアは遠くからネレイをねらうアーチャーを倒していった。ネレイよりも魔法に優れたスノーフィアは、ボルト系魔法の一つ「アイスボルト」でアーチャーを牽制しつつ、強攻撃を加えていく。物の数十秒でゴブリンたちを全滅させた。

「フィア、ありがとね」

「いえ。怪我しなくてよかったです」

ネレイはスノーフィアのことを「フィア」と呼ぶ。理由は単純に呼びやすいからだ。スノーフィアに労いの言葉をかけ、ヒールをかける。スノーフィアもネレイにヒールをかけた。

二人の快進撃はさらに続き、とうとう目的のハーブがある部屋までたどり着いた。

「ベースハーブ・マナハーブ、ブラッディハーブ、サンライトハーブ……一通りそろってよかった。ハーブを採ったら帰ろうか？」

頭を撫でられ嬉しそうにしながら嘶くスノーフィアから離れ、ネレイはハーブ採集を始める。その間、念のためスノーフィアは周りを見張っている。

(いつもネレイ様のお役にたててよかった……)

そんなことを考えながら見張りを続けていると、ネレイがやってきた。どうやらハーブは無事採取できたようだ。

「お待たせ。じゃあ女神の翼で帰ろうか」

そう言つとネレイは鞆から一枚の羽根を取り出した。「女神の翼」は使つと最後に行った町や村まで一瞬で戻れる魔法アイテムだ。もっと強力な女神の翼もある。

翼を使い、ネレイを中心に魔法陣は展開する。陣に入らなければおいて行かれてしまうので、スノーフィアは急いで陣の中に入る。すると、二人の姿は薄れていき消えた。

第1話 紅い少女（後書き）

第一話です。マビの小説はずっと前からやりたいと思っていたのですが、時間がなくなかなかできませんでした。大学に入りようやく自分のパソコンを買ってもらったので、始めることができました。更新は不定期になると思いますが、どうかよろしくお願いします。

第2話 予感

女神の翼で村に戻ってきたネレイとスノーフィア。パララはもう沈みかかっている、辺り一面茜色に染めていた。

本格的に夜になってしまいう前にネレイは学校に行くことにした。

ティルコネイルには二人の教師がいて一人はレイナルド、もう一人はラサである。レイナルドは主に武器の扱いを指導していて、逆にラサは魔法の指導をしている。二人とも優秀な教師で、生徒からの信頼も厚い。ネレイも二人から魔法と剣術をそれぞれ学んだ。

学校からはまだ剣の打ち合う音が聞こえる。おそらくまだ授業中なのだろう。

授業が終わるまでどうしようかと思っていると向こうの道の方から、見覚えのある顔の女の子がやってきた。

「ネレイ、久しぶり！スノーフィアもご無沙汰」

「こんばんは、セレネ」

ネレイは微笑みながらあいさつを返し、スノーフィアはまた嚙くちなみに、スノーフィアは、滅多なことがない限りネレイ以外に話さない。

女の子の名前はセレネ。13歳。ネレイと同じミレシアンである。漆黒のまっすぐな長い髪に、青い瞳をしている。物を作るのが好きで、ネレイの着ている「アリツシユアシユビンアーマー」もセレネが作った。ネレイとセレネはかなり仲がいい。

「今日は鎧姿じゃないのね」

セレネはよく白銀の「ローズプレートアーマー」を装備しているが今日は違った。今は白い「見習い錬金術のコート」を着ていた。「鎧は危ないところに行く時だけで、普段はこれだよ。物を作るときはこれが一番楽なんだ」

確かに、ネレイはセレネとはお互いに材料探しなどで一緒にいることしかなく、普段は生産をやっているということしか知らない。

「そういえば、どうしてここに？」

いつもだと、「ダンバートン」や「バンホール」にいるはずである。なぜティルコネイルにいるのかネレイは不思議に思い尋ねた。

「シルクが急遽必要になってね、材料がないからここに来たの」

ティルコネイルにはクモがいる。そのクモが出す「クモの糸」がシルクの材料となる。バンホールにはそもそもクモはいないし、ダンバートンにはいることはいろのだが、数が少ない。

「なるほど、だからティルコネイルに来たのね」

完全に雑談モードになる前に、二人のもとにレイナルドがやってきた。

「ネレイと、セレネか？ どうしてここにいるのだ？」

どうやら授業がいつの間にか終わっていたらしかった。

「レイナルドさん、こんばんは！」

セレネは、元気にあいさつをする。その姿は微笑ましい。

「こんばんは、先生。今お時間大丈夫ですか？」

ネレイは、昼間にスノーフィアと話したことについてレイナルドに相談しようと思っていた。

「構わないよ。セレネも来るかい？」

レイナルドが言っていると、セレネは、はい、と言い嬉しそうになかに入っていく。あまりセレネには話したくない内容だが仕方がない。

『僕はセレネさんにも伝えた方がいいと思いますよ。彼女もミレシアンですし、全く関係ないとは言いがたいでしょう』

ネレイの考えを読み取ったのかスノーフィアはそんなことを言う。それもそうか、とネレイは思うことにした。

「何か話でもあるのか？」

中に入り、一息つくと、レイナルドが言った。ネレイは昼間の出来事を話した。

「北西の草原地帯のオオカミなのですが、以前よりも少し凶暴的になったなと思ひまして…」

レイナルドはやはり、という顔をしてため息をついた。

「確かに私もそれを感じていた。ラサに協力してもらって、生け捕りにしたオオカミを調べたところ、こんなものが出てきた」

机の上に一枚のお札のようなものを出す。

「これは？」

セレネが不思議そうにそれを見ている。一見、ただの紙切れのようには見えなくてもいいが、中央に不気味な文様が描かれている。

「魔府：ですか。この文様は魔族のもですね？」

魔法が苦手とはいえ、魔力はそれなりにあるネレイにはその魔府が発する邪悪な魔力を感じ取っていた。

「魔府って何なの？ネレイ、レイナルドさん」

一人状況を把握できないセレネにレイナルドは説明をする。

「魔府とは、魔力のこもった札のことだ。ネレイも言ったとおり、中央に書いてある文様は魔族の印だ。魔族の文様が描かれた魔府がオオカミから出てきたってことは、そのオオカミは魔族に操られているということになる」

「ここ最近急に凶暴になったということは、魔族に何らかしらの動きがあるってことですよね？先生」

ネレイの言葉にレイナルドは頷く。

「…生徒が早く武器を満身に扱えるレベルにしなければならぬ。まだ時間はあるかも、しれないが、村を守るのはネレイを除いて私、ラサ、トレボーだけでは心もとない」

トレボーというのは、ティルコネイルの自警団員である。（自警団といっても、今はトレボー一人だが）ラサは、剣技などは全くだが、魔法に秀でているため、それなりに戦える。

「操られた動物たちを元に戻す方法はないの？」

動物が好きなセレネには、魔族にいいように使われている動物がかわいそうで仕方なかった。

「動物を生け捕りにし、魔法を使えば、魔府を取り出すことは可能だ。しかし難しいだろう」

つまり、魔族に操られた動物は殺すしかないということだろう。セレネにとつては残酷な結論であつた。

どうにもならないと分かつたセレネは泣きそうな顔をしていた。見かねて、ネレイは自分の考えをセレネに話す。

「セレネ、動物を殺すしかないというのは、本当に悲しいことだと私も思う。でもね、そうでもない、動物たちも魔族から解放されない」

セレネはじつと聞いている。ネレイはさらに続ける。

「魂は巡りに巡つて、またエリンに生まれてくる。だから、大丈夫。いたずらに殺めるわけじゃないから、動物たちもきつとわかつてくれると思うよ」

優しく、穏やかにネレイは言う。都合のいい話かもしれない。でも、そう思わなければ、何もできない。そしてまた、他の誰かが傷つくかもしれない。そうすれば必ず後悔するだろう。何よりも、セレネがこれ以上泣きそうな顔をしているのを見ていられなかった。

「そうだね、ネレイ！」

まだ少し泣きそうな表情だが、元気が出たようである。ネレイは少し安心した。レイナルドもネレイには感心していた。そんな考え方もあつたのか、と新鮮な気持であつた。

「とにかく、セレネもネレイも、自分の身を守ることを優先してほしい」

特に、ネレイ。と付け加えられてしまったネレイはなぜそんなことを言われるのだろうと疑問に感じた。ただ、セレネは何か納得していたようであつたので、余計に分からなかった。

ネレイは、時々かなり無茶をする。しかも、本人は全くの無自覚なので、周りはいつもハラハラしている。この前も、セレネをかばつて大怪我をしたばかりである。ある人曰く、「自己犠牲の代名詞」だそう。セレネもそう思う。

「そつえばシルバーはどうしたの？」

話を変えるわけではないと思うが、ネレイは唐突にそんなこと

を聞いてきた。シルバー、とはセレネのペットの犬である。犬種はボルゾイで、戦闘力に優れているため、戦闘な苦手なセレネを常に補佐している存在だ。それなのに、セレネのそばにいないことがとても気になった。

「シルバーならノラに捕まってるよ」

その答えにネレイは苦笑した。ノラ、とはティルコネイルの宿屋の主人ピルアスの姪である。幼いころに両親を亡くし、ノラはピルアスに育てられた。それ以来ノラは、宿屋の看板娘となっている。ちなみにかんりの犬好き。

きつと今頃シルバーは、ノラに過度な愛情を注がれていることだろうが、シルバーにしてみたらいい迷惑だろう。

「相変わらずね…ノラは…」

そろそろ本格的に夜になってしまったため、ネレイたちはお暇することにした。動物ことたちのことはレイナルドからダンカンに伝えてくれるということになり、ネレイはレイナルドに礼を言い、学校を後にした。

「こんなにも静かで穏やかだと、魔族が何か企んでるなんて嘘だと思いたくなるね」

セレネがイウェカを見上げながらそんなことを言う。

「そうだね。でも、きつと近いうちに何かが起こる。そんな気がする」

「そうになったら、ネレイはどうするの？」

セレネは不安そうな顔でネレイに問う。

「そうになったら私にできることをするまで。仮に戦うことになれば、全力で相手を倒すまで」

迷いもなく、きつぱりとネレイは言い切った。そんなネレイの姿を見て、セレネはさらに不安になる。

「レイナルドさんも言っていたけど、本当に無理だけはしないでね」
ネレイがこの前大怪我を負ったのは自分のせいであることは間違

いないだろう。ただ、仮に自分以外の他の人、たとえ赤の他人だとしてもネレイは同じことをしたはずだ。ネレイがいつか自分たちの前から消えてしまうのではないか。そんな予感に駆られてしまう。

「大丈夫。心配してくれてありがとうね。セレネ」

優しく微笑みながら、ネレイは言うがきつとまた必ず無理、無茶をするだろう。

「ネレイのこと守ってね」

ネレイに聞こえないように、こっそりとスノーフィアにそんなお願いをしてしまう。スノーフィアは任せておけ、というように小さく嘶いた。

ネレイはそんな光景を見て、頭に？マークを浮かべていた。

第2話 予感（後書き）

第2話です。無駄に長くなってしまいました……。さつさと本題入れよと思うわけですが、なかなかうまくいきませんね。今回は、セレネというキャラを登場させました。これからもっとキャラクターが増えていきます。ちなみに、名前など、多少は変えていることもあります。ほとんどそのまま実在するキャラクターです。どう描いていくか本当に悩みどころですが、頑張っていきたいと思っています。

第3話 結界の土地

「じゃあ、ネレイ無理しないでね」

次の朝、セレネは再びダンバートンに戻るようになった。シルバーも一緒である。ティルコネイルの入り口まで見送りに来たネレイに、セレネはそう言う。すると、シルバーまで「ワン」と一言。

（どうやら、犬にまで心配されているようね…）

犬の言葉はわからないが、セレネの態度と、言葉と、シルバーの吠えるタイミングで、ネレイはそう直感した。

「セレネも気を付けてね。タヌキや、キツネ、オオカミならまだしも、クマまで凶暴化している可能性もあると思うから…」

セレネがネレイのことを心配しているように、ネレイもセレネのことをかなり心配している。戦闘が苦手で、なおかつ自分よりも年下である。心配ではないはずがない。

「大丈夫。ネレイと違って、私は弓だし…」

それに、とネレイは続ける。

「シルバーもいるしね」

だから大丈夫、というと、セレネは去っていった。

「大丈夫かなあ…」

『大丈夫でしょう。セレネさんも言っていたように彼女にはシルバーがついています』

スノーフィアはシルバーの実力を知っている。だからこそその言葉だった。

「そうね。ひとまず今は無事を祈りましょう」

ネレイとスノーフィアも、ティルコネイルの中に戻っていった。

広場につくと、ダンカンがいた。誰かを探しているようで、辺りを見回している。

「誰かお探しですか？ダンカンさん」

するとダンカンは、苦笑し、「ネレイを探していたのだよ」と言う。

「何か用ですか？」

「うむ。ちよつと頼みがあつてな…」

ダンカンはその頼みとやらを話し始めた…。

「寒いね、ここ」

『そりゃあそうでしょうとも』

辺り一面雪原であり、ここには、季節関係なく雪が積もっている。ここは、ティルコネイルの北西にあり、ウルラ大陸最北端の土地、「シドスネッター」である。

悲しみにとらわれたドルイド（高位の魔法使いのこと）がクマとなつて隠居しているのだの、シドスネッターの北側には結界のせいで足を踏み入れることはできないのだの、ここに関しての伝承は様々で、真実は誰にもわからない。

ただ、誰も近寄らないことから、「結界の土地」とも呼ばれている。

なぜか雪だるまが大量に作られているところがあり、そこは「雪だるまの墓」と名付けられた。ダンカンの頼みというのは、その雪だるまの内の一つの中に友人のイヤリングが紛れ込んでしまったらしい。それを探してくれないかと、ネレイに頼んできたのだった。

『正直、物探しは自分でしてくださいと言いたいところです』

スノーフィアが珍しくぼやく。

「そう言わずに。ここはコヨーテもいるからちよつと危ないし、それに、あんな噂があればね…」

あんな噂とは、シドスネッターの最奥に、変わったクマがいるらしい。何でもそのクマは、マナハープを欲しがらしい。そのクマは人を襲わないとは言われているが、それでも怖いものは怖いだろう。無論、ネレイにそのような気持ちは無いが。

『ネレイ様もわざわざマナハープを持参するなんて…』

呆れた様なスノーフィアの言葉に、ネレイは苦笑する。ダンカンからマナハーブを食べるクマがいる、と聞き興味本位でマナハーブをいくつか持ってきたのだ。普段は穏やかで、いくらか大人びているが、そういう不思議なことについては年相応の反応を見せるネレイであつた。

「何…これ…？」

「さ、さあ…？」

二人しては珍しく、呆然とその場に立っていた。

目の前には、本当に大量の雪だるま。この中からイヤリングを探せというのか。今すぐ帰りたくなつたが、ダンカンの頼みとあらば、そうもいかない。

一つ一つ調べてみるしかない…。ネレイとスノーフィアはうんざりして、手分けしてイヤリングを探していった…。

「み、見つけました！ネレイ様ー！！」

ようやくイヤリングを探し当てたスノーフィアは、興奮して、大声をネレイの頭に響かせる。ネレイは頭の中がキーン…、として顔をしかめる。

「そ、そんな大きな声を出さなくても…あ、頭が…」

「す、すみません…つい興奮して…」

そう言いつつ、スノーフィアはネレイに例のイヤリングを差し出す。

「これがそのイヤリングかあ…結構古いね」

イヤリングは片方しかなかったが、ダンカンの話によれば、これでいいはずだ。辺りはもう若干薄暗い。

「よし、あとはこれを届けるだけだね」

そう言い、本格的に夜になる前にネレイは帰ろうとする。それをスノーフィアが慌てて引き止める。

「ネレイ様！マナハーブはどうするのですか？」

「あ……」

そうであった。マナハーブを持ってきたのはクマにあげるためだ。このまま帰ってしまつては意味がない。

ひとまず例のクマを探すために、シドスネッターのさらに北を指す。不思議な門をくぐり抜け、二人はようやくクマを見つけた。

クマは二人を見て、少し驚いたように見えた。

『変ですね……。クマの声が聞こえません』

動物であるスノーフィアはクマであれ、オオカミであれ、犬であれとにかく動物の言葉がわかる。声が聞こえない、と言うのは、本当に珍しい。

ネレイはとにかくマナハーブをクマにあげることにした。

「あなたが、マナハーブを食べてるっていうクマさんかな？マナハーブ、持ってきたんだけど、食べる？」

ネレイがマナハーブをクマに差し出すと、クマはおずおずとネレイの手にあるハーブを受け取り、食べ始めた。

一通り食べ終わると、そのクマは地面に（驚くべきことに！）文字を書き始めた。

……た……る……ら……く……

（たる……ら……く……？……つつ！？）

急にネレイは激しい頭痛に襲われた。

「……うあ……ああ……つつ！」

『ネレイ様！？』

急に苦しみだしたネレイにスノーフィアは慌てる。ネレイの頭痛は激しくなる一方である。何も考えられないほどの激しい痛み、ネレイの意識は薄れていく。膝をつき、倒れる直前、誰かに抱き留められたようで地面に直撃はしなかった。そして完全に意識を失った。

——聞こえますか？——

…誰……？

——私の声が聞こえますね……？——

…聞こえているよ……

——助けてください！——

…え………？

——ティルナノイが破壊されようとしています……！——

…ティルナノイ？何……どこなの……？あなたは……どこにいるの………？

——お願い……！私の所に来てください……！——

…待って！

再び意識が薄れていく中、ネレイが見えたのは、一人の美しい女性。まっすぐな長いカラスの濡れ羽のような漆黒の髪。両手は鎖で繋がれている。一見普通の女性と何ら変わらない容姿であったが、一つだけ違ったのは、女性の背中に生えている漆黒の翼だった…。

第3話 結界の土地（後書き）

第3話です。ようやく物語始動です。3話にしてようやく女神様の声が聞こえました。文章の最初のほうはもうほんとにグダグダ…
文才がほしい今日この頃です…orz

第4話 シドスネッターの夜

目の前の少女が頭を抱え、急に苦しみだしたときはさすがの私も焦りました。少女が倒れた時はとっさに抱き留めたものの、どうしたらいいかわかりませんでした。少女の傍らにいるミニユニコーンも主人が倒れたことにより、かなり取り乱しているようです。

『ネレイ様っ！ネレイ様あ…！』

ミニユニコーンが少女に語りかけますが、返事はなし。どうやら意識を失ってしまったようです。というより…このミニユニコーン、人とのコミュニケーションができるのです。

「驚きました。あなたはどうやら人間に自分の思いを伝えることができるのですね？」

『！？』

私の言葉にミニユニコーンはさらに混乱したようです。なぜ分かるのだ、というような様子です。実際は私もかなり驚いています。

「私はドルイドですから、マナの流れはわかるのです。あなたはマナを使い相手に思いを伝えているようですから、たとえ対象があなたの主人だとしても、私もあなたの思いが分かります」

そう説明をすると、ミニユニコーンも私に語りかけてきました。

『ネレイ様は一体どうなってしまったのですか？なぜ急に苦しみだしたのですか！？』

「それは私にも分かりません。ですが、もう苦しんではいけないようです」

少し自分を落ち着かせて少女を見ると、少女はまだ少し青ざめていましたが、顔は穏やかでした。それを見て、私もミニユニコーンも少し安心する。

「今はただ、意識を失っているだけでしょう。心配はないはずですよ。とはいえ、一度祭壇まで運びましょう」

そう言う私はその少女を抱き上げ、祭壇まで運ぶため、歩きだ

した。ミニユニコーンも心配そうに後をついてきました。

『ところであなたは、いったい何者なのでしょう？』

スノーフィアは、目の前の青年にそう尋ねた。

青年は金髪の短い髪、新緑の瞳をしていて、四角い眼鏡をかけている。背中には、なぜかマンドリン（楽器の一種）を背負って、茶色い「マフラーローブ」を着ていた。ちなみに、青年はスノーフィアからの基準で見てもかなりの美青年である。

会話ができることを知られ、なおかつ、自分の伝えたい人だけに思いを伝えているつもりでもこの青年には意味がないため、スノーフィアは遠慮なく話かけることにした。

この青年はネレイが倒れた後、シドスネッターの最北にある「ドルイドの祭壇」までネレイを運び、介抱してくれて、さらにネレイの今の装備では寒いだろうということで、予備のローブを着せてくれている。スノーフィアは、この青年は悪い人ではないと判断し、心を許していた。ネレイ以外の人間にこんな気持ちを抱くのは久しぶりであった。

「私の名はタルラークと言います。彼女からマナハーブをもらったクマの正体です」

『ええ！あのマナハーブを食べる変わったクマはあなただったのですか？なぜ、クマに？』

タルラークは少しだけ迷った様子を見せたが、それは一瞬のことです、すぐに話し始めた。

「私はある場所を目指し、仲間と共に旅をしていました。旅の終わりが見え始めた時に深い傷を負い、マナを制御する神経がやられてしまったのです」

コホッ、とせき込み、タルラークは続ける。

「傷を負ったマナの神経はヒーラーでは治せません。マナハーブを摂取する必要があるのですが、人間にはマナハーブは毒です。なの

でマナハーブを摂取しても無害な体になるために、クマの姿でいるわけです」

夜ならイウエカのおかげで、マナハーブを摂取する必要はないのでこの姿で大丈夫ですが…、とタルラークは付け加える。

説明を聞いてもいくらなんでもクマはちよつと、とスノーフィアは思わなくもなかったが、とりあえずは納得した。

確かにマナハーブは人間には毒だ。そのままで摂取するには人間では危険すぎる。ネレイもそのことを問題視していた。

「ところで、あなたたちはいったいどうしてここにいらしたのですか？」

「僕たちはダンカンさんに頼まれて、あるものを探していたんです。ここまで来たのは、ダンカンさんから、マナハーブを食べるクマがいると聞いてネレイ様…あ、遅くなりましたが、僕はスノーフィア・マスターはネレイです」

自己紹介をしていなかったことに今更気づいたスノーフィアは自分とネレイの名をタルラークに告げ、続ける。

「ネレイ様が『そのクマに会って行こう』と言ったので、ハーブを持ってきたんです」

その説明にタルラークは納得したようであった。

「理由はどうであれ、マナハーブをいただいたことはこちらとしてもありがたい限りです」

ありがとう、と言うタルラークに対しスノーフィアはとんでもないと答える。

ネレイは未だ目覚める気配なし。このままだと朝になってしまうので、自分が背負って村まで戻った方がいいかと思ったその矢先のことであった。

妙な気配がする。

すると、木の陰から、コヨーテが一匹、また一匹と現れてあつという間に3人を囲んでしまった。

コヨーテたちはみな殺気立っているのにもかかわらず、目は赤く、

虚ろであった。魔府を取り付けられ、魔族に操られた動物であった。スノーフィアはすでに臨戦態勢に入っていた。タルラークはやむなし、と見て戦う態勢に入っていた。ネレイはやっぱり目覚める気配なし。

『タルラークさん！大丈夫なのですか？』

彼にとつて、魔法を使う戦いはものすごく体に負担がかかるだろう。そう思いスノーフィアは言う。

「多少なら問題ありません。それよりも、このコヨーテたちはいつもと違います。一体なぜ…」

『最近動物たちが急に凶暴化しました。魔族に操られているのとこのです』

状況が状況なので、細かいところは省き、ざっと説明をする。タルラークも何か思うところがあったのか、すぐに納得した。

「かわいそうですが、倒すしかないということですね？」

そう言うとは彼は電撃を高速で放つ魔法「ライトニングボルト」を一匹のコヨーテに放つ。最初の一撃を受けたコヨーテから、電撃がほかのコヨーテに移り、さらにダメージを負わせる。

スノーフィアも同じ魔法を放ち、さらに強攻撃を加える。

二人とも特にダメージは負ってないが、さすがに数が多すぎ、加えて、タルラークは強力な魔法が打てない状況の中で二人はなかなか数を減らせないでいた。

「さすがにきついですね…」

タルラークがそうつぶやく。いたって冷静に見える彼だが、内心少し焦っていた。

スノーフィアもとうとう敵の攻撃を食らってしまい、負傷してしまった。

徐々に包囲網を狭められて二人がさすがにまずいと感じたその時、背後から何か飛んでコヨーテの一匹にあたった。コヨーテがひっくり返り、起き上がるうともがいていいると、追い打ちをかけるように何かがコヨーテの上から何かを振り下ろす。そして、周りの敵を巻

き込みながら、己を中心に何かを風車のごとく振り回し、コヨーテたちを吹き飛ばす。

最初に飛んできたのは炎の魔法「ファイアボルト」。次にコヨーテに追い打ちをかけた何かが持っていたのはトウハンドソード。そして、剣の使い手は先ほどまで気を失っていたネレイであった。

第4話 シドスネッターの夜（後書き）

第4話です。相変わらずひどい文章ですね…。最初のほうなんてほんとグダグダ。ようやくタルラークさん出てきました。しかし、会話はネレイではなくスノーフィアとなんて…。完全に私の趣味です。いろいろごめんなさい。

第5話 物語始動

目が覚め、ふと周りを見回したところ、自分たちがコヨーテの群に囲まれているのを見たときはかなり驚いた。

すぐさま臨戦態勢に入ることができたのはさすがとしか言いようがない。バスタードソードでは攻撃力が低いためトウハンドソード抜き、一気に攻撃した。

ネレイの攻撃で敵の数は減ったがまだ油断は禁物である。

『ネレイ様、体の方は大丈夫なのですか！？』

「問題なし。それよりもこの子たちも魔族に？」

「先ほど魔府らしき物が出ていたので間違いないかと」

ネレイの質問にタルラークはそう答えると、すかさずライトニングボルトを放つ。

とにかく数を減らすことが最優先と判断し、ネレイも更に攻撃を加えた。二人から三人になったことではるかに効率が良くなり、それから数分後、コヨーテたちを撃退することに成功した。

「なんでまたこんなに集まって来たのか！本当になにが起こってるんだ？」

呆然とタルラークは呟いた。ネレイはそんなタルラークを意味ありげに見つめていた。

「それはあなたが一番感づいているんじゃないですか？」

ネレイの言葉に一瞬固まってからタルラークは問う。

「なぜ、そのように思うのですか？」

「伝説の三戦士」

さらにネレイは続ける。

「伝説と言っただけじゃないし、むしろここ数年の話だとは思っけど、あなたはそのうちの一人でしょう？」

「なぜそう言い切れるのです？三戦士の名前はあまり知られてないはずですよ？」

「夢を…見ました」

そう言つとネレイは先ほど自分が氣を失つた後に起きたことを話し始めた。夢の中で女神に助けを求められたこと、その後に見た三戦士の出会いを。それらを語つた後、タルラークは観念したかのようになため息をついた。

「あなたの言うとおり、私は三戦士と言われているものの一人です。私が生きていることを知っているのはティルコネイルのメイブン司祭のみです」

「残りの二人は…？」

ネレイが問うと、タルラークは苦い表情でわからない、と答えた。「なぜか助かったのは私だけなのです。何度も探しに行こうと思いましたが…」

しかし、と彼は自分の胸に手を当てる。

「そのミニニコーン…スノーフィアにも話しましたが、深手を負い、ここを離れることができません…」

傷を負い、大切な仲間を探しにいけないとはどれだけ辛いことなのだろう。悲しみと絶望に支配されたタルラークにかける言葉がネレイには見つからなかった。

「ところで…二つだけ、あなたに言いたいことがあります」

その時、タルラークの瞳に少しだけ怒りの感情が宿つたことをネレイは見逃さなかった。何があつたのだ、尋ねる前に、彼は驚きの言葉を放つ。

「女神は危険です。あなたを騙し、私たちと同じ目に合わせるつもりです。これ以上関わらない方がいいでしょう。二つ目は、私たちは三戦士と呼ばれていますが、真実は違います。もう一人だけ仲間がいたのです。ちょうどあなたのような赤い髪の少女…彼女は確実に死に至りました。…目の前で息を引き取つたので間違いありません…」

タルラークの言葉はネレイには衝撃の連続だった。女神の部分に關してもそうだし、さらに仲間がもう一人いたなど、聞いたことも

なかった。とにかく、聞いておかなければならないことがある。

「なぜ女神が危険なのですか？騙すとはどういうことなのでしょう
か？」

タルラークは少し考える素振りを見せ、何かを決心したかのように頷く。

「いいでしょう。これをバリダンジョンにささげれば、どうい
うことかわかるはずです」

そう言うとは彼は懐から何か紙切れのようなものをネレイに差し出
してきた。

「特別な魔族通行書です。これを使えば普通のアイテムをささげた
時とはまた更に違うダンジョンに入ることができます。…何度でも
言いますが、女神は信じてはいけません」

タルラークの言葉にどこか引つ掛かりを感じながらもネレイは通
行書を受け取り、シドスネットターを後にした。

「私たちだけじゃ…彼女の命を奪い、仲間たちと引き離れただけじ
や飽き足らず、あの子までも巻き込むつもりか…」

ネレイたちの後姿を見ながらタルラークは低く、怒りを込めて呟
いた…。

カン！、カン！、カン！、ガキンツ！！

「うお！？手が滑った！」

「……………」

ところ変わってテイルコネイル。あの後ネレイたちは旅立つ前に
あたって、そろそろ武器の修理をしておこうという話になった。

正直言ってネレイは乗り気ではなかった。この村で唯一の鍛冶屋
ファーガスは、作るのは得意だが、修理するのは苦手と言う極端な
人物で、壊した武器は数知れず。「ウェポンブレイカー（武器を破
壊する者）」として有名である。

今回ネレイが預けたのはバスタードソード…。トウハンドソード
は絶対にここでは修理に出さないと決めている。ネレイがあまりト

ウハンドソードを使わないのはそのためである。バスタードソードは何か代えがきくので、出しても問題ない。問題ないが、実際に破壊されると何とも言い難い感情に支配される。

「む…すまなかった…」

「ファーガスが何とも申し訳なさそうにバスタードソード（の残骸）を渡す。」

「構いませんよ。はなから期待していません」

残骸を受け取りながら何ともひどい言葉を容赦なく浴びせるネレイ。この時ばかりは情けをかけるつもりはない。

「これ、もらってもどうしようもないですし、そっちで処分してください。あと、新しいバスタードソードください」

「本当に容赦ないな…」

「そう思うのであれば、修理の練習したらどうです？もちろん客の武器で、ではなくね」

新しいバスタードソードを受け取り、ネレイたちはその場を立ち去った。

『ネレイ様、いくら何でも…もう少しだけ情けをかけた方が…』

スノーフィアの言葉にネレイは首を振る。

「正直代えが聞くとはいえ、使ってた武器が壊れるのって結構シロクなの。だからあれでいいの」

普段は温厚で穏やかなネレイだが、武器や鎧の事となると途端に人が変わるネレイであった。

「バリってことは『バンホール』よね」

バンホールとは、鉾山があり、職人の村とも呼ばれている。施設は充実してるとは言えないが、武器、防具の質がウルラーである。ネレイはあまり行くことがないが、セレネはよくバンホールに通っているようである。何でも、バンホールにはウルラで一番腕のいい鍛冶屋がいるそうだ。やる気のある弟子を募集してるらしい。

「バンホールの鍛冶屋だったら、このトウハンドソードの修理も頼めるわね」

『じゃあなぜ、バスタードソードもバンホールでやろうとしないのですか…』

「バスタードソード、もうボロボロだったから」

武器のことはほどほどにして、二人は旅立つ。バンホールを目指すのであれば、ダンバートンを通らなければならない。本格的な準備はそこですることにし、ひとまずテイルコネイルを出発した。

第5話 物語始動（後書き）

ようやく第5話のアップです。最近本当に多忙で…。しかも相変わらずのグダグダの文章で本当に申し訳ないですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2304t/>

マビノギ 楽園を求める者たち

2011年7月17日03時19分発行